2021年10月03日

山形国際ドキュメンタリー映画祭
日本プログラム『牛久』上映

世界最大級の日本映画の祭典 ドイツ2021”ニッポン・コネクション”にて

「ニッポン・ドックス賞〔観客賞〕」受賞

アジアを代表する国際ドキュメンタリー映画祭 韓国2021”DMZDocs”にて

アジア部門の最優秀賞「アジアの視線」賞受賞

山形国際ドキュメンタリー映画祭

日本プログラム

『牛久』2021.10.09（土） 上映 ｜14:00～15:27

質疑応答｜15:37～16:27

名古屋入管でのウィシュマ・サンダマリさんの死に、多くの日本人が衝撃を受けました。入管は、今も「保安上の問題」「亡くなられた方の名誉・尊厳の問題」を理由に、ビデオ映像の開示を拒否しています。そのさなかにも、牛久入管で警備員が収容者の首を絞め、けがをさせる事件がおこり、大阪地裁では、大阪入管職員による暴行がビデオ開示で明らかにされました。

当事者の痛切な声

今年5月、映画『牛久』世界初上映に先立ち、日本外国特派員協会記者会見で監督のトーマス・アッシュは、出演者たちの勇気ある行動について、次のように語りました。 「参加者の方々は、その顔を隠すことなく、音声を変えることなく、ストーリーを共有することに同意してくださいました。リスクがあるにもかかわらず彼らが信頼して、自分の真実を語ってくださったことに、心より感謝いたします」

トーマス監督と同席した2名の出演者デニズ氏とルイス・クリスチャン氏は、共に茨城県牛久市の入管施設に収容された経験を持ちます。ルイス・クリスチャン氏は、今の入管の改革の必要性についてこう語りました。「入管が今やっていること、例えば病院に連れていかない、結婚を妨害するといったことは、法律に基づいてやっていることじゃないんです。法律にないことを入管がやっている。なので、法律が改善されても、入管の考え方、やり方が変わらないと、状況は改善されず、同じことが

続くと思います」と訴えました。

2021.09.16　DMZ Docs授賞式で『牛久』出演者、世界へメッセージ発信

韓国のコヤン市とパジュ市からオンラインで開催された韓国ドキュメンタリー映画祭〔DMZ Docs〕。DMZ Docsが、非武装地帯〔DMZ〕を開催の地に選んで今年で13回目。DMZ Docsは、世界に向けて、ドキュメンタリー映画の力による「平和、生活、コミュニケーション」の推進と、韓国をはじめアジアのドキュメンタリー映画製作者に、新たな機会を提供することを目指しています。このアジアを代表する国際ドキュメンタリー映画祭で、日本の入管施設に長期収容された難民申請中の人や多くの外国人にまつわる問題を取り上げたたドキュメンタリー作品『牛久』が、アジア初上映されました。

9月16日にコヤン市で開催した閉会式は、オンラインでも配信され、『牛久』はアジアコンペティション部門の最高賞である「アジアの視点」賞を受賞しました。この受賞は、ドイツ・フランクフルトで開催された第21回日本映画祭ニッポン・コネクションのワールドプレミア上映でのニッポン・ドックス賞に続く2つ目の受賞となります。

授賞式で、アジア・コンペティション審査委員イ・スジョン監督は

「新型コロナウイルスの大流行と、監禁され隠蔽された難民の生活と撮影の制約自体を映画的な形式に用い、観客をその現実に参加せざるをえなくすることで、ドキュメンタリーの力を示した作品」と授賞理由を述べました。

今現在は仮放免となっている『牛久』出演者から「皆さんが信じてくださり、とても幸せに思います」という喜びのビデオ・メッセージも公開されました。「普通の人間がいられる場所ではありません」、「この映画をご覧いただけば内部の様子が、よく分かるでしょう」。「だからこそ世界中の人にご覧いただきたい」、「今こそ、人権を尊重すべき時です」「私たちの問題は世界の問題です。世界の問題は私たちの問題です」という当事者の切実な声が、非武装地帯〔DMZ〕から世界に向けて発信されました。

2020.6.6ドイツ　ニッポン・コネクション　ニッポン・ドックス賞〔観客賞〕受賞

8月21日のNHKワールド放送、日本映画の今を世界に発信する番組「J-FLICKS」は、ドイツの“ニッポン・コネクション”を特集。世界最大級の日本映画の祭典“ニッポン・コネクション”。今年6月開催された第21回映画祭も、昨年同様　オンライン開催となりました。開催期間は6日間。80本以上もの日本映画が上映されました。

番組では、ニッポン・ドックス賞〔観客賞〕を受賞した『牛久』を紹介。その一部映像が流れました。面会室で「体が　弱って　食欲がない」という収容者が「小説を持ってきてもらえれば…。本は　すごく大切です。食べ物より 何よりも 大切です」と訴える姿がありました。

映画祭で上映された作品のなかでも、『牛久』は「衝撃的で本当に痛ましい内容」だったいうナビゲータに対し、映画監督・上智大学教授ジョン・ウィリアムス氏は、「日本映画の過去10年を振り返ってみても、最も重要な作品のうちの一つだろう」とのコメントを寄せてくださいました。

「撮影規制があり情報の管理も非常に厳しい日本の入管施設にあって、アッシュ監督は隠しカメラでの撮影を余儀なくされました。出演者には事前に撮影許可を取っています。収容所での扱いや長期収容について、自分たちの声を届けるため、彼らは取材を許し、必死でに実状を訴えていま

す」。ウィリアムス氏は、こう収容者の切実な思いを述べましたが、その一方で、国会での法務大臣の答弁については、こうコメントしています。

「収容所での扱いや長期収容について（入管）体制が　どうなっているのか、（仮放免後の）就労は許されるのか…法務大臣がそんな基本的な質問にも答えられない…衝撃的です。体制の責任者が知らないなんて、皮肉ですよね」。「弱い立場に置かれる難民申請者たちを、　閉じ込め、彼らの働く意志と能力をムダする理由が理解できません」。

日本の入管施設には　撮影規制があり情報の管理も非常に厳しいことから、日本の収容所の非人道的な実情について、「何が起きていて難民申請者が、どう扱われているか、人々は全く知らないようです」と日本の社会の実情を述べ、だからこそ、「あらゆる人に観てもらいたい作品です」との期待を表明してくれました。

いよいよ山形国際ドキュメンタリー映画祭

～比類なき不正義 an injustice of Olympic proporation

さらなる虐待行為が明るみになるなかでの国内上映

東京2020オリンピック競技大会の開催国として、日本に世界中の注目が集まるなか、入管施設内での相次ぐ虐待・不当行為の告発を受け、入管システムとはどうなっているのか、今、国民からの厳しい視線が注がれています。

今年3月6日に、33歳のウィシュマ・サンダマリ・ラトナヤケさんが名古屋の入管施設で亡くなりました。過去14年間に入管施設内で死亡した収容者は、ウィシュマさんで17人目です。ウィシュマさんが死亡した事件について、入管庁が公表した「報告書」では、死因さえ特定されず、さらには、2週間のビデオ記録のうち2時間に切り取られたビデオのみの公開。代理弁護士の立ち会いを求める遺族に対し、入管庁はこれを拒否。8月12日、映像を確認した遺族は「動物のように扱っていた」とショックを受け、「日本にいる全ての外国人が見るべき映像です」と訴えました。

その5日後の8月17日、映画が撮影された牛久入管で、警備員が収容者の首を絞め、全治2週間の頸椎捻挫を負わせる事件が発生しました。この警備員は、入管職員に「冗談のつもりで」ヘッドロックしただけだと報告しました。さらに、大阪出入国在留管理局で2017年に職員から暴行を受け、骨折したとして訴えた元収容者の大阪地裁の口頭弁論で、事件当時の監視映像が公開されました。監視映像では、14時間以上、後ろ手に手錠をかけられ、放置された収容者の様子が記録されていました。

入管とはいったいどういう施設なのか。知られざれる「不正義」に、目が向けられている今、ドキュメンタリー映画祭として名高い山形国際ドキュメンタリー映画祭にて、10月9日、映画『牛久』がいよいよ、国内上映されます。今回は新型コロナへの対応として、オンライン開催となります。「日本プログラム」枠で上映される本作について、映画祭「権力の暴走に警鐘を鳴らす告発映画」と解説しています。

東京近郊の牛久入国管理センターで、2019年後半から収容者へのインタビューを開始しました。そこで記録した映像と証言は、極限の状況に置かれた収容者たちの姿です。最初、教会の友人とボランティアとして行っていた面会ですが、面会活動を非難するつもりはありませんが、面会だけで問題が解決するのか、これ以上被害者が増えないようにするためになにをしたらいいのかという考えが次第に強くなりました。実際に人の人権が妨げられている、侵されているという現実を目撃してしまったことに対し、何ができるのか、映画を作らなければならない、証拠を収集しなければならな

いと考えました。

この作品は、収束の兆しが見えない新型コロナによるパンデミック、東京オリンピック開催を前に、日本政府による無期限の拘束、暴力的な強制送還のなかにおかれた収容者の実情、日本の妥協を許さない難民政策と、日本最大の人権スキャンダルを捉えています。

映画祭『牛久』上映のスケジュール

『牛久』は、ロッテルダム（カメラジャパン・フェスティバル、9月22～26日）に続き、ウイーン（ジャパニュアル、10月21～31日）、ミュンヘン（アンダードックス、10月7～13日）、ロンドン（ロンドン東アジア映画祭、10月21～31日）など。

そして日本（山形国際ドキュメンタリー映画祭、10月9日）での上映が決まっています。

最新上映スケジュールは『牛久』公式ウェブサイト（www.UshikuFilm.com）にて更新いたします。

トーマス・アッシュ略歴

トーマス・アッシュはこれまでに、福島第一原子力発電所事故が及ぼす子どもたちへの健康被害を取り上げた長編ドキュメンタリー『グレー・ゾーンの中』（2012）、『A2-B-C』（2013）など、健康や医療をテーマとした作品を制作。近年は、死と生と向き合った記録『-1287』（2014）、『おみおくり～Sending Off～』（2019）などを制作。また、東京の男性セックスワーカーについてのドキュメンタリー映画『売買ボーイズ』（2017年／イタコ監督 トーマス・アッシュ製作・総指揮）の作品で知られています。英国ブリストル大学で映像・テレビ製作学の修士号を取得。2000年に日本に移住。

現在、東京大学教養学部国際日本研究コース非常勤講師として学生達に撮影・編集することの楽しさや苦労を教えるなどのかたわら、ドキュメンタリー映画の作成など、その活動は多岐にわたります。

『牛久』は、日本で制作した長編ドキュメンタリー第6作目となります。

トーマス・アッシュ作品・受賞歴

“牛久” (日本/ 2021年/ 87分)
2021 DMZ国際ドキュメンタリー映画祭アジアコンペティション金賞
2021 ニッポンコネクション観客賞「ニッポン・ドックス賞」

“おみおくり～**Sending Off**～” (日本/ 2019年/ 77分)
2019 ニッポンコネクション観客賞
2021 Life Beyond Life FF 長編ドキュメンタリー部門でグランプリ

“父なる愛生せば **(The Father’s Love Begotten)**” (日本/ 2019年/ 17分)

2019 LISFE 観客賞

“売買ボーイズ (Boys for Sale)” (日本/ 2017年/ 77分)

2018 Nachtschatten映画祭の長編部門でグランプリ
2018 KASHISH Mumbai FF長編ドキュメンタリー最優秀賞
2018 Oxford映画祭でLGBTQ長編最優秀賞
2017 EL LUGAR SIN LIMITES映画祭の長編ドキュメンタリー部門でグランプリ
2017 Durban Gay & Lesbian映画祭ドキュメンタリー部門グランプリ
2017 Playa del Carmen Queer映画祭ドキュメンタリー部門グランプリ
2017 20世紀フォックス社の一部門であるフォックスインクルージョン賞

“-1287’ (日本/ 2014年/70分/

2015 DMZ国際ドキュメンタリー映画祭アジアコンペティション金賞

2015 ニッポンコネクション観客賞

2015 Lake Champlain International Film Festival観客賞

2016 SoCal Film Festival観客賞

“A2-B-C” (日本/ 2013年/71分/)

2013 ニッポン・コネクション映画祭で ニッポン・ビジョン賞
2013 グアム映画祭最優秀賞
2013 ウクライナ人権映画祭、グランプリ賞
2014 国際ウラニウム映画祭のイエローオスカー特別賞
2014 Lake Champlain Int FF Award for Outstanding Work in Film

“In the Grey Zone”, (日本/2012年/89分)

2012 Rhode Island 国際映画祭で 最優秀新人賞受賞
2012 Rhode Island 国際映画祭で 聴衆賞

“the ballad of vicki and jake” (イギリス/2006年/84分)

2006 Visions du Reel 国際ドキュメンタリー映画祭最優秀新人賞受賞

以上

その他の情報、映画スチール、映画評の写しなどをご希望の方は、下記までご連絡下さ:

E-mail: press@UshikuFilm.com

編集者の方向けの追加情報:

公式ウェブサイト: www.UshikuFilm.com

公式ツイッター: https://twitter.com/ushikufilm

ツイッター・アカウント名：　　@ushikufilm

公式インスタグラム：　　https://instagram.com/ushikufilm

インスタグラム・アカウント名：　　@ushikufilm

山形国際ドキュメンタリー映画祭：　https://www.yidff.jp/

■2021年9月16日DMZ Docs閉会式映像と『牛久』出演者ビデオ・メッセージ

https://www.ushikufilm.com/press/dmz-docs-award-ceremony/

■2021年8月21日のNHKワールド「J-FLICKS」番組紹介

https://www.ushikufilmcom/press/j-flicks-segment/

作品スペック：

87分／日本

言語：日本語／英語（両字幕付き）

Synopsis あらすじ

東日本入国管理センター、いわゆる『牛久』は、茨城県牛久市にある大規模な入国管理施設の一つである。ここに、難民として保護されることを求めやってきた、多くの人々が収容されている。昨今、日本政府による入管法改正の動きは、様々な議論を巻き起こした。そのなか、制作者は、1年と半年間、当事者たちの了解を得て、彼らの助けを求める声を記録し続けた。本作は施設が定めるメディアを含む訪問者への厳しい規制を切り抜け、制作された。収容者を犯罪者扱いし、長期拘束し、家族を分断し、心を蝕み、死に追いやる構造。この作品を通じ、観客は収容者と直接対面することになる。収束の兆しが見えない新型コロナによるパンデミック、東京オリンピック開催を前に、彼らは日本政府による長期拘束、暴力的な強制送還のなかにいる。